

昭和26年3月卒業

第21期

昭和24年秋季～25年夏季



◎昭和24年

- ・秋季県北（9月17～18日）
能代南7－0鷹巣農
能代南13－6能代工
- ・第1回全県選抜（10月11～12日）
能代南5－2角館
能代南0－6本荘

◎昭和25年

- ・第32回全県大会（19校出場）
能代南7－15秋田市立

秋田市立	1	0	2	5	1	4	0	2	0	15
能代南	0	0	1	0	0	3	0	3	0	7

（秋田市立）加藤・越後谷－福田

（能代南）本庄・佐藤（忠）－斉藤

〈部長〉熊谷 忠一

〈監督〉相澤 東一

〈部員〉3年生

◎本庄 文三 佐藤（川添）規夫
小山 彪一 竹村（上田）俊男
斉藤 正 湊 慶太郎
佐々木 弘

能代南高1年生になる

甲子園大会（第30回全国高等学校野球選手権大会となる）全県大会準優勝

- ・昭和24年2月 第一次能代大火
- ・同4月 硬式野球部入部

敗戦間もない混沌の社会、能代大火による混沌たる世相の中で、私の野球部生活は、3年夏の県大会迄1年間、2シーズンの短いものであったが、思い出は多い。物資不足、食糧は配給制の時代、野球用具は勿論不足だった。グローブ、スパイクは中古品、練習用のバットは竹製の重い圧縮バット、練習用ボールは縫目を修理したもので、変形変色したものが多かった。ユニフォームは先輩からのお下がりだった。試合が近づくと、ニューバット、真っ白なボールで妙に軽いなど感じた。用具についてはこれが当たり前と不足不便はなかったものだ。草野球出の私には硬式野球部の練習は厳しかった。気合いっぱいの先輩達がグラウンドへ来て鍛えてくれた。三本間で先輩達の全力投球を捕球する「一人だち」、同じ間隔での300本ノック、失心する者にはバケツの水を、素手でのゴロの捕球、苦しかったが、宿敵秋田南（現秋田高）打倒の為と耐えた。

無我夢中のうちに全県大会、前年全県決勝に進出した故村木欣四郎、故通沢輝之両先輩を欠いただけ、主将小笠原美津雄（LF）、加茂谷彦（1B）、小坂公一（2B）、故飯坂勝美（3B）、故柳谷祥一（RF）、宮腰庄一郎（P控）の3年生、故本庄文三（P）、斉藤正（C）、上田俊男（CF）、佐々木弘（C控）、川添規夫（内野控）の2年生、故斉藤寛敦（SS）、故松谷儀朗（1B控）、浅野峯太郎（外野控）の1

回 想

佐藤（川添）規夫

- ・昭和20年4月 能代中学入学（校舎は現市役所第四庁舎辺り）
- ・同8月 太平洋戦争全面敗北 終戦
- ・昭和21年 野球部復活 甲子園大会（第28回全国中等学校優勝野球大会復活）
- ・昭和23年3月 樽子山新校舎へ移転
- ・同4月 新学制実施（併設中学校3年在学中）

年生での陣容で打倒秋田高を合言葉に臨んだ大会だったが、1回戦秋田高の軍門に降った。悔しかった。

秋の新人戦準決勝角館高戦、私の一塁頭上を越えスタンド入りする大暴投で1対2で逆転負け。ナインに申し訳なく、今に至るも夢にみる。

新人戦終了後、退部する者が多く練習時は6、7名であった。冬期練習は翌年球春迄グラウンド、天理教間裸足での往復ランニングで足腰を鍛え、来るべき時に備えた。

25年、故相澤東一監督、故熊谷忠一郎部長、故湊慶太郎マネ、故本庄文三主将が決まった。部員の募集が急務だった。此の年から新制中学の卒業生が進学して来た(能代一中、二中の第一期黄金時代の選手)。校内では「硬式野球部は、県北の雄、に満足するにあらず、全県制覇、奥羽制覇、甲子園を目指すものなり、来れ野球部へ」と檄をとばし、校外では中学野球に関与されていた先輩達の勧誘もあり部員数も整った。旧制中学野球から新制中学卒参加の新制高校野球への転換期に、監督はチーム編成、練習方法に大変苦慮されたと思う。

全県大会に臨む陣容も決まった。

(P)本庄・(C)斉藤・(CF)上田(竹村)・(LF)小山彪一・(SS)川添(佐藤)の三年生、(1B)松谷・(RF)浅野の二年生、(P控)故佐藤忠雄・(2B)鈴木冽・(C控)故武嶋東太郎・(3B)佐藤光雄・(外野控)大塚明法・赤塚小昭の1年生だった。

緒戦秋田市立高を撃破し、再々度秋田高と対決をと意気込んだが、打撃戦総力戦の末7対15で敗れた。打倒秋田高で明け暮れた、私の短い高校野球生活も、嚇々たる戦績もなく、後事を後輩に託し終わった。

樽子山を巣立って55年、後輩達は4度の甲子園出場を果たした。

昭和38年、明治大学島岡監督の薫陶を受けた闘将太田久監督(新7)(昭和35~54年=現4代松陵会長・平成9年~)のもと全県制覇(故牛丸幸也氏(19期)と抱き合い、飛び上がって歓喜、涙が出た、感激した)、宿願の甲子園初出場を果

たした。第45回記念大会(一県一代表)、西宮球場が割り当てられた。緒戦長浜北高戦に大勝、校旗を見上げ校歌を斉唱した。感動した。同時に小笠原恒太郎部長(9期)、太田監督、菊谷良己主将、簾内政雄投手はじめ選手達を誉め称えたいと思った。2回戦岡山東商戦は5対1で敗れた。此の年の夏能代は野球一色で燃えた。能高野球部甲子園出場の為と市民からは多大な物心両面の支援があり、松陵会員も募金活動や各方面への手配りに結束力を発揮した。

昭和52年、2年生剛速球左腕高松直志投手(新31)を擁し、奥羽制覇、第59回甲子園大会2度目の出場、期待は大であったが、緒戦で高崎商に10対2で敗れた。

昭和53年、第60回甲子園大会から、一県一代表制となる。全県決勝、本荘高工藤と本校高松との投手戦の末3対2で勝利。2年連続3度目の甲子園出場。緒戦伝統校、強打の箕島高戦、初回の三塁打スクイズの1点だけ、試合時間1時間40分余、箕島尾藤監督の心胆を寒からしめた大会屈指の左腕剛速球投手高松の夏は終わった。

平成4年、尾形徳昭監督(昭和62~平成3年)に師事した納谷聡監督(新34)(平成4~11年)のもと成田昇投手(新45)の力投で全県制覇、第74回甲子園大会、4度目の出場を果たした。緒戦佐賀東高と対戦4対3で勝利、甲子園球場で初めて校旗を揚げ、小林治氏(9期)(3代松陵会長=平成4~8年)、故牛丸幸也氏らと肩を組み校歌を斉唱した。泣いた。球場へ持参し試合を見守って頂いた平川民治先生、佐藤憲一郎氏、相澤東一氏の遺影も笑っていた。

2回戦、強豪尽誠学園に7対0で敗れた。

昭和38年甲子園初出場以来14年毎の甲子園、5度目の出場も近いかと夢膨らむ。

後輩に望む!これからは甲子園出場は勿論、甲子園で如何すれば勝てるかを命題に、精進されんことを!そして全国制覇を!!

私は現在人生の朱夏、白秋の時を過ぎ、玄冬の季節の中にいる。あの青春時の高校野球生活を支

えて頂いた先輩達や松陵会事務局（昭和35～54年）としてお世話頂いた人々が懐かしく思い出される。

野球部の初代監督、能中・能高を通しての指導者、負けじ魂を説いてくれた故平川民治先生、戦前コーチとして戦後新制中学野球育成に力を尽くされた佐藤勝蔵先生、松陵会の基を作り募金活動に奔走された初代松陵会長故佐藤憲一郎氏（3期）（昭和30～53年）、樽子クラブ・松陵クラブの創設者であり、監督であり、松陵会会則を全面改訂特に全国制覇を会則に明記した2代松陵会長故相澤東一氏（7期）（昭和54～平成3年）、親身も及ばぬお世話頂いた熊谷忠一先生（5期）、コーチ監督として（奥羽大会初出場の名バッテリー）尽力された故鈴木音安、故杉原茂（12期）両氏、戦後初の主将故池井安昌氏（18期）、奉加帳を持ち募金に共に廻り、公式野球は必ず応援に見えた故牛丸幸也氏、会運営に貢献された故杉本松太郎氏（3期）、故宮腰庄作氏（4期）、故島田哲一郎氏（7期）、故柳谷健六氏（8期）、故村中忠吉氏（9期）、故館岡彦直氏、故五十嵐勇助氏（10期）、西村全蔵氏（12期）、故稲垣正氏（15期）、大山正晴氏（18期）、金田一哲哉氏（19期）、故畠昭男氏（新1）、浅野峯太郎氏（新4）、東京松陵会・

故腰山実政氏（2期）、金谷忠治、故今久男（12期）両氏、熊谷洋三氏（16期）、吉方盛恭氏（19期）、故飯坂勝美氏（新2）・・・

母校野球部へ情熱を注いだ先輩球友の中でも物故者は多い。物故者には心からのご冥福を、存命者には益々のご長寿を祈りたい。

“1期から新4期”能中を知る者には殊更、樽子山への思いがある。そこには佐々木満氏（15期）の筆になる青春の碑がある。

高墙へ 樽子山から移転して30年

母校の隆昌、松陵会の発展、硬式野球部の飛躍を祈るや切なるものがある。



昭和23年11月 樽子山グラウンド



◎昭和25年

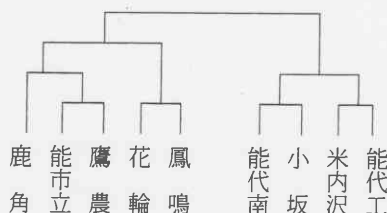
・秋季全県選抜

能代南7－3秋田商

能代南2－7秋田南（現・秋田高）

◎昭和26年

・春季県北（5月） スコア不明



・第33回全県大会（22校出場）

能代南10－0大曲農

能代南3－4秋田南（現・秋田高）

能代南	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3
秋田南	0	0	0	0	2	0	0	2	×	4

(能代南) 佐藤忠一 武嶋

(秋田南) 佐藤幸一 藤崎

〈部長〉 熊谷 忠一

〈監督〉 相澤 東一

〈部員〉 3年生

◎松谷 儀朗

浅野峯太郎

佐藤 進

斉藤 寛敦

飯坂 義明

能高野球部の6年間

浅野 峯太郎

太平洋戦争で中断していた全国中等学校野球選手権大会が昭和21年に復活した。この年能代中学は準決勝で大館中と対戦する事になっていた。当時、秋田への1番列車は東能代始発で朝5時すぎであったと記憶している。

もちろん、現在のように車社会ではないので、応援する為に、試合に間に合わせるには1番列車に乗らなければならない。その日は朝3時半に起床し、4時に友人2人と朝・昼用の握り飯を持ち、リュックを背負い線路伝いに朝靄の立ちこめる中を、4キロの道程を歩いた。

2時間をかけ秋田に着くが、途中、土崎駅構内では工機部に勤める人達が7、80人も降りていた。秋田駅に降りた後、駅前にバラック建ての金座街を通り抜け、中通りを過ぎ大町を抜け真っ直ぐ行くと丁字路になっていた。

そこから向かい側は一面田圃で青々と波打っていた。真ん中に3m位の道路があり立って見ると前方右手の方に小高く木々に囲まれた森が見え、それが八橋球場であった。すぐ隣には气象台があり、気象観測をしている模様であった。

この日は雲一つなく快晴で炎天下の試合となった。球場に着いた時には試合が始まっていて、我が校は1回表に4点を先制し、2回表にもランナ

ーを2人置いてバッターの佐藤(勇)が右中間タイムリーを放つが、入ったのは1点で1人はホームでアウトとなり結局その裏に6点を返され、6対5で涙をのんだ。能中のエースは加藤(武)さんで、投球フォームが綺麗で格好よかった。

私が野球との関わりを持ったのはここからであった。この八橋球場は現在迄に、幾多の選手が負けて口惜しい思いをした事か。38年に簾内投手を擁し、決勝で大曲農を破って甲子園へ初出場を決めた瞬間の喜び、翌年、西奥羽大会の決勝で秋田工に破れた時の口惜しさ、高松投手が本荘高の工藤に投げ勝った時、翌々年決勝で延長戦になり秋田商に負けた時、今でも脳裏に浮かぶ。八橋球場には戦前、戦後70年の思いが一杯蓄積されている。

私は昭和21年4月に能代中学校に入学した後、8月に野球部に入った。当時は野球部と云えば硬式であった。以後、25年迄の4年間球拾いの毎日が続く事になる。

それは中学2年生(22年)に6・3・3制の学制改革が施行された為で全国中等学校野球選手権大会が全国高校野球選手権大会と改称になり中学生は大会への出場が不可能となったので本庄投手を擁して翌年を期していた我が校はエース不在となり、にわか投手が続出すると云う事態となった。

ナイン皆が投手で一試合に3人、4人で投げるのは当たり前であった。諸先輩達も一度はマウンドに上がって投げた経験がある筈だ。村木主将、牛丸マネージャー、島田部長の頃であった。我々1年生は20人の仲間がいて2年生になれば後輩が入部してくると思っていた矢先の事で、校名も改称になり能代南高校の併設中学生となり、後輩の入部は高校2年生までお預けとなった。

その間に諸先輩が入部し活躍し、巣立っていてもいつも最下級生で来る日も来る日も、相変わらず球拾いの毎日であった。練習もキャッチボールとトスバッティング位でバッティングの練習に入ったのは高校1年生の秋頃だったと思う。

当時は物資に乏しい時代であったのでバックネットは鉄網でなく、普段は2本の竹の棒に白い糸を網状に張り巡らしていて、試合になればさらに

一張をつけ加えた。毎日これを取り外すのが我々の役目であった。

用具も不足でボールと云えばトスバッティング用はボール自体が打たれ過ぎて膨らみ、中から糸が飛び出している状態で、カーンと云う音には程遠く縫い目は綻びていて、これを皆で毎日補修した。靴の修理の為に使用する針と糸で最初是一本針で、後には二刀流なみに2本の針でボールを縫うのが日課で放課後の練習に間に合わせる為に授業中にも縫うのも屢々だった。

ボールは少なくピッチング用は新しくいいもので2、3ヶ位でバッティング用は程度の良いものが10球で、残りはトス用で前述の如く重い音がした。

バットも決して丈夫でなく中には木の目が曲がっているのもある始末で折れ易かった。折れたバットにはテープを巻いて素振りやトスバッティング用に使用した。

グローブ、スパイクも布製で部分には皮が付いているがすぐ破けていた。我々の球拾いの格好もトレパン等はむろん無く、上着を脱いでシャツを腕捲りし、ズボンをたくし上げ裸足の日々であった。

監督は平川民治氏で、練習後のミーティングはグラウンドに50cm四方のダイヤモンドを画き、その線が10cmの溝になる迄に1時間以上立ち放しで延々と続いた。

全県予選が近づくと諸先輩達がダイヤモンドに並行に立ち気合いをかける毎日が続いた。この頃

は県大会で優勝しても奥羽大会（秋田、岩手、青森）があり代表校が1校の枠であったので全県を制するのが一つの壁で甲子園への夢切符はなかなか手に入らなかったのが実状であった。

その後監督は相澤東一氏になった。主将も村木一小笠原一本庄一松谷と続く事となる。我々も4年間のボールボーイ生活も終わり、高校2年になったが入部して来た新人は前年に秋田県中学校野球大会で全県を制した一中と二中の黄金時代の選手達であった。1年生と云えどもすぐレギュラーに起用されていたので我々が3年の春になったら20人いた仲間も、たったの3人になっていた。

当時の部長は熊谷先生で何とかして全県を制したいという意気込みがあり、学校での合宿時のおかず豚汁を大釜に煮て準備してくれていた。

26年6月には野球協会長の佐藤勝蔵さんの肝入りで早稲田の久保田選手が来能し、一緒に我々を激励した後に山田選手（成田高一早稲田）が派遣されベンチ入りして采配をふるったが2回戦で宿敵秋田南（現・秋田高）に4対3で涙をのんだ。同期の松谷が平成8年9月7日に斉藤が平成10年10月に、2年までマネージャーを務めた飯坂が平成10年9月にそれぞれ鬼籍に入り、一級下の武嶋、佐藤（忠）も天へ旅立ってゆき寂しい限りである。

しかしこれ迄入部以来、現役時代を通し現在までの50数年は何処にいても母校の選手が甲子園を目指し、切磋琢磨している姿を心から応援しているし、この事は未来永劫に続くであろう。

